

うんぺんじ やまねこ  
雲辺寺の山猫

むかし  
昔は、

「雲辺寺には山猫がいるから、登る時には決して魚の類は持って行つてはならない。」

と、言われており、山人（山へ木を切りに行く人）も弁当には魚の類は持って行きませんでした。

その山猫は、力持ちで

「大人にもおそいかかって来るのだ。」

と恐れられていました。また、片目であるともいわれていました。それはその山猫が悪いことをしたので、雲辺寺のいんげんさんが怒って、持っていた数珠の親玉を投げつけたのが目に当たり、片目がつぶれたのだということなのです。

それで、この辺の人は魚を持って、山に登ったことはなかったのですが、ちょうど、大正の終わり頃、私の十五才の冬休みのことです。

友だち四人で雲辺寺の登山をかね、この話に挑戦をしました。友人四人のうち三人には母親がありましたから、弁当には魚は

いれてくれません。一人には母親がなかったので、天ぶらを持って行くことにしました。

その頃、萩原にも、うどん屋があつて、天ぶらを売っておりましたが、子どもが十本も買いますと、話の種になり、親たちに知れるので、わざわざ辻まで買いに行ったのです。

天ぶらは、その友人が持つて、みんなのまん中に並んで登山しました。途中一人の友人が「ニャオーン。」と猫の鳴き声をしますと、天ぶらを持つている友人が、ギョツとする場面がありました。しかし、何事もなく、あの昔の茶堂で、いろりのそばに、すわつて弁当を食べました。天ぶらは、坊さんに見られないように、注意しながら食べはじめました。その時、「ニャオーン」本物の猫が出てきました。みんな四人とも、ヒヤツとしましたが、それは、寺の飼猫でしたので、こともなく弁当を食べ終わり胸をなでおろしました。



〈岡下和雄〉

『ふるさとむかしむかし』大野原町より